

心的外傷論で読み解く物語

——『ピンポン』を一例として——

小 松 楠 緒 子

要 旨

著名な精神医学者、ジュディス・ハーマンは、1992年に著書“Trauma and Recovery”において、被害者の内面に深く切り込む画期的な心的外傷論を提唱した。この理論は、1994年にマンフレッド・S・ガットマッカー賞を受けるなど、高い評価を得ている。本稿では、当理論を用いて、松本大洋の『ピンポン』を読み解く。特に、その解釈をめぐり、諸説が提示され、評価が定まらない最終章（主人公が将来を期待されつつも競技卓球を引退、小学校の教師になるという堅実な進路を選択する）を中心に考察を進め、その意味の一端を解明することを目的とする。さらに文化社会学的視点から、松本大洋作品の読解に関する今後の課題を提示する所存である。

1. 序論

暇つぶしなんですよ。

何が？

卓球です。

英単語覚えるのも…

どうせ死ぬまでの暇つぶしです。

—スマイルのことは。

顧問小泉に、なぜ朝練に来ないのかと聞かれて〔松本1996a〕。

『ピンポン』は哲学的な作風で知られる漫画家、松本大洋の代表作であり、2002年には窪塚洋介主演、宮藤官九郎脚本で映画化され、話題を呼んだ。一見、卓球をめぐる爽やかな青春ストーリーだが、生きるとは何かという根源的な問題を扱った奥深い作品である。

主人公スマイル⁽¹⁾は、卓球の才能に恵まれ、周囲に期待されたが、最終章では、競技卓球を引退し、小学校の教員になる道を選ぶ。そして、スマイルのもとを訪れたかつてのライバル、ドラゴン⁽²⁾が、競技者としての自分の素質に限界を感じると弱音を吐くと、「いいじゃないですか、凡庸」「僕ワリと好きですよ、そういう選手」と語り、「眠いや」とあくびをする。⁽³⁾

このラストの意味、妥当性に関しては、主としてネット上で諸説が提示されているが、評価が定まっていないように思われる。⁽⁴⁾

そこで本稿では、スマイルは心的外傷を負った存在であるという推定に基づき、ハーマンの心的外傷論を用いて、『ピンポン』の最終章の意味の一端を解明する。『ピンポン』を、トラウマを負った主人公スマイルの成長物語と捉え、心的外傷論の観点からみることで、最終章に関し、論理的かつ統一的な解釈を提示することができると思われるからである。

そして最後に、文化社会学的視点から、松本大洋作品の読解に関する今後の課題を提示する。

2. ハーマン理論の概要

回復のための第一原則は、その後を生きる者に力を与えることにある。トラウマを経験した者自身が、自分の回復の主体であり、判定者でなければならない。

—ジュディス・ハーマン『心的外傷と回復』より〔ハーマン1999：205-206〕

『心的外傷と回復』の著者として知られるジュディス・ハーマンの略歴は、1968年ハーバード大医学部卒業、1990年よりハーバード大医学部准教授（現在に至る）というものであり、心的外傷論の第一人者として、国際的に認められている〔ハーマン1999：414-415〕。ハーマンの心的外傷論は、著書“Trauma and Recovery”⁽⁵⁾に綴られている。本書は、心的外傷をめぐる歴史、症状、治癒過程について詳細に書かれており、PTSD 関連分野における必読書としての地位を確立している。また、一般の読者も理解し、読むことができるトラウマ理論関係の書籍のパイオニアであり、心的外傷論をメジャーにしたという功績を持つ。なお、1994年、ハーマンは本書によって、アメリカ精神医学会およびアメリカ精神医学法学会から、マンフレッド・S・ガットマッカー賞を受けた〔ハーマン1999：405〕。

ハーマンによると、心的外傷を負った者は、狭窄（自分の関心や生活世界を狭めること）、恐怖などの症状を示し、絶対孤立無縁感を持つ。治療者は、被害者のケアをし、励まし、エンパワーに向けてサポートを行う。その過程で、治療者は転移、逆転移を体験し、被害者同様ところに傷を負うので、治療者に対するケア、ソーシャルサポートが必要である。心的外傷を克服したとき、被害者はエンパワー（有力化）され、新しい自己を確立し、周囲・社会と再結合する。生存者使命に目覚め、社会運動に参加して次世代の育成に貢献するケースもある。被害者は、被害者としての人生に別れを告げ、被害体験を再構成して新たな人生に統合し、平穏な生活を享受できるようになる〔ハーマン1999〕。

ハーマンの理論は、被害者・加害者の心理に鋭く迫るものであると同時に、彼らに寄りそい、導くようなスタンスをも有している。たとえば、

「復讐、ゆるしを加害者に対して行う、あるいはつぐないを加害者に求める現世的努力は心的外傷からの回復に貢献しない。なぜならこれらの行為、幻想は、被害者がかつて傷つけられた人間関係に連れ戻すからだ。むしろ被害者は、過去の記憶、人間関係から決然と離れて独立

し、新たな人格と人生を獲得すべきであろう。その決意から新たなアイデンティティーが生まれ、新しい人格のもとで、被害体験を再構成、統合するという活路がひらかれる」〔ハーマン1999：273-294〕

「回復のための第一原則は、その後を生きる者に力を与えることにある。トラウマを経験した者自身が、自分の回復の主体であり、判定者でなければならない。本人以外の者は、助言をし、支持し、そばにいて立会い、手を添え、助け、温かい感情を向け、ケアすることぐらいはできる。しかし、キュアするのは、あくまで本人自身である。善意にあふれ、的を得た救援の多くが挫折するのは、エンパワメント（有力化）という基本原則がみられない場合である」〔ハーマン1999：205-206〕

という箇所はハーマン理論の要諦であり、オリジナリティーがみられる。

治療の過程については、転移、逆転移に加え、治療者が負う心的外傷とその回復方法を詳細に説明している。治療者へのソーシャルサポートに言及している点に、ハーマン理論のオリジナリティーがみられる〔ハーマン1999：205-235〕。

3. 『ピンポン』のあらすじ

僕、ペコみたいになりたいんだ。

ペコみたいに！！

ースマイルのことは。

幼少時、ペコにあこがれて〔松本1996〕。

“卓球はどうせ死ぬまでの暇つぶし”と言い放つスマイルは、卓球の才能に恵まれ、将来を期待されながらも、闘争心に欠けるクールな高校生である。スマイルの才能を買う卓球部の顧問小泉を、“僕につきまとわないでください”と拒絶し、ライバル、ドラゴンの前では“卓球に人生を懸けるなんてナンセンス”と吐き捨てる。級友からのいじめ、両親の離婚を経験したスマイルは笑顔を見せず、凍りついた目をした少年であった。

自分の人生や周囲と距離を置き、淡々とふるまうスマイルが唯一こころをゆるすのが幼なじみのペコである。

「この星の一等賞になりたいの、俺はっ！！」「世界チャンプ目指してんだな、これがっ！！」「夢なの、俺のっ！！」

こう叫ぶペコは自分の夢を目指して突き進むことに疑いを持たない快男児。卓球の才能は拔群だが練習はさぼり気味。勉強は苦手で成績は最悪。しかし、ペコはまったく気にしない。

「俺、高校ハネったらヨーロッパ行く構えよ」

ペコはヨーロッパでプロになるという夢を持っていた。

「格好いいね、ソレ」「応援するよペコ」

自分の夢を信じるペコに、スマイルはあこがれを抱いていた。

スマイルが卓球を始めたきっかけは、ペコの誘いであった。ペコは、級友からいじめを受け、閉じ込められたロッカーから出ようとしないスマイルを引っ張り出して言った。

「知ってるか？ 血って鉄みたいな味するんだぜっ！！」

「何ソレ？」とスマイルは返すが、ペコはとりあわない。

「卓球しようぜスマイル」「俺が教えてやんよっ！！」

こうしてスマイルは、オババ⁽⁶⁾が運営する卓球道場タムラに通うことになったのである。

その後もスマイルは卓球道場に通い続け、高校もペコと同じ片瀬高校に進学、ペコと共に卓球部に入った。⁽⁷⁾

高1のインターハイ予選で、スマイルは強豪コン・ウエンガ⁽⁸⁾を相手にリードを奪うも、精神面のもろさが出て敗退した。一方、ペコは特訓を積んで力をつけた幼なじみのアクマ⁽⁹⁾に敗れる。

その後スマイルは、小泉⁽¹⁰⁾の特訓を受け、着実に力をつける。しかしペコは、自らの才能に限界を感じ、ゲームセンターに入り浸るなどすさんだ生活を送っていた。しかし、卓球道場タムラでアルバイトをしていたとき、幼いころ、スマイルと一緒に大会に出て入賞したときの写真をみかける。笑っているスマイルをみたペコは、卓球でヒーローになることによってスマイルを救うという使命を思い出し、卓球に復帰する。オババとその息子道夫さんの特訓に耐え、力をつけたペコは、スマイルを救出するため、インターハイ予選会場に向かう。

この大会において、地力で勝るスマイルは、順当に決勝進出を決める。ペコは準決勝でドラゴンと当たり、苦戦する。しかし、卓球を楽しむという本来のスタイルを思い出し、のびのびとしたプレイでドラゴンを下す。このときすでに、大会前からペコがいためていた膝は限界に達していた。周囲は当然、棄権を勧めたが、ペコは決勝に出ると言い張る。その理由は、「スマイルが呼んでんよ。アイツはもう、ずっと長いことオレを待ってる……」。そんなペコにオババは、「ペコ。愛してるぜ」と声をかけて送り出し、スマイルとペコの決勝戦が実現した。スマイルはペコが来ると信じ、待っていた。

「ピバッ」

「遅いよ、ペコ」

ゲームが始まる。怪我を負うペコの弱点を容赦なく攻めるスマイル。それを受けて立ち、切り返すペコ。ふたりは挫折と再起を経て成長していた。無心にラリーを続ける両者にやがて、至福の瞬間が訪れる。飛翔するような感覚をおぼえ、重苦しい日常から解放される。ペコは覚醒を経て真のヒーローへと進化し、トラウマを負ったスマイルのこころは癒されてゆく。いじめを受け、苦しんだ記憶がゆっくりと再構成される。つらかった過去が意味のあるものへと変化し、ゆっくりと現在につながる。泣きながら返球するスマイル、全力でこたえるペコ。体育館には非日常的な時間が流れていた。

“僕の血は鉄の味がする”

人生にはつらいこともあるが、乗り越えればそれが糧になる。スマイルはペコのことばの意

味を初めて理解したのだった。

試合中にもかかわらず、フロアから出たオババは、煙草を吸いながら、「勝ち負けが意味持つ試合でもねえしな」とつぶやいた。

高2のインターハイ予選から5年のある日、小泉は自宅で鍋を探していた。

「今日は誠が来る」

「来るって晩ゴハンにでしょ？ まだお昼過ぎよ」

「鍋、鍋、何処よ？」

小泉は鍋をどっかりと机の上に置き、正座してスマイルが来るのを待つのがだった。

一方、青年になったスマイルは、平穏な生活を送っていた。大学に通うかたわら、タムラで子供たちに卓球を教えている。卓球雑誌を読みつつ、

「これ読んだ？ オババ。ペコの特集」

とオババに声をかける。

「穴開くぐれえな」

旧友ペコはプロになり、ドイツで目覚ましい活躍をしているのだ。それを報じるはなばなしのいい記事に際してもまったく悔しさをみせないスマイル。彼はすでに競技卓球から身をひいていた。

「エブリバディ集合！！」

「今日は、君らにかっちょいい魔球を授けるぜっ」

その教え方は、ペコと小泉ゆずりである。

そこへかつてのライバル、ドラゴン（風間）が訪ねてくる。海に向かうふたり。

「そうかァ…月本は小学校の先生目指すかァ」

「ええ…来週から実習です」

青年になったスマイルは堅実な進路を選んでいた。

「私はね、代表からはずれてしまったよ、月本」

海をみつめ、おもむろに口を開くドラゴン。

「知ってます」

淡々と答えるスマイル。

ドラゴンは自らの才能の限界に突き当たり、もがいている。しかしスマイルは、関心を示さない。

「最近時々考える…」 「自分はこのまま凡庸な選手で終わってしまうのではないかと…」

「いいじゃないですか、凡庸。僕ワリと好きですよ、そういう選手」

「ばか言うな、嫌だよ」

あくまで上を目指しもがき続ける風間に対し、スマイルは地に足がついた平穏な日常に価値を見出していた。

「知ってます風間さん？」 「佐久間結婚するの」

「いや聞いてない、いつだ？」

「秋です…10月」

「そうかァ…結婚かァアイツ」

打ち寄せる波をみつめるふたり。

「ふああ…」

ふいにスマイルがあくびをする。

「眠いや」

「はっ」

そのとき、ドイツではペコの試合が始まろうとしていた。

4. スマイルの心的外傷に関する考察

誰か来る！

大丈夫。

僕はここで平気なんだ。

僕はここにいたいんだ。

外へ出たらまた…

また…

—スマイルのことは。

同級生にロッカーに閉じ込められて〔松本1996a〕。

ハーマンによると、心的外傷を負った者は、狭窄(自分の関心や生活世界を狭めること)、侵入(フラッシュバック等の不愉快な記憶に晒されること)、恐怖などの症状を示し、絶対孤立無縁感を持つ〔ハーマン1992〕。ここでは、スマイルが心的外傷を負っていたかどうかをハーマンの心的外傷論と照合しつつ、考察する。

4-1. 狭窄について

狭窄とは、自分が関わる世界、関心を狭めることであり、スマイルは、自分の殻に閉じこもり、狭い範囲で生活している。具体的には、次の通りである。

4-1-1. 人間関係

スマイルがところをゆるしているのは、幼なじみのペコだけである。その他の人間が深く関わろうとすると即座に拒絶する。たとえばオババがカブのコーチを頼んだときには、

「あー、でもたぶん無理だよ。僕、子供嫌いだし…」

と回答し、ドアを閉めて立ち去っている。

小泉がスマイルにほどこす特訓に対しても、

「それがなんの意味を持つのですか？」

と反発し、小泉に「君は、そうやってすぐ自分のカラに閉じこもるのね」と揶揄されている。(11)

スマイルの才能を認め、アプローチをかけてくるドラゴンの前では、“卓球に命をかけるなんてナンセンス”と言いつつ。小泉の家に見舞いに行き、奥さんに“夕飯を食べていったら”と誘われたときも、

「よその家で食事するの苦手なんです」

と無愛想に断った。

また、スマイルはしばしば鼻歌をうたうが、鼻歌は、スマイルにとって外界との壁になっていると思われる。自作の歌（ハミング）をうたうことで、スマイルは自分の世界に行き、そこにとどまることができるのであろう。ピンチに陥ったとき、ひとりになりたいとき、ペコとテレパシーで会話したいとき、スマイルはハミングをする。高2時のインターハイ予選でも、階段に座ってルービックキューブをしつつ、鼻歌をうたっていた。これは自分の殻にこもるための儀式であり、狭窄の一症状と推測される。

他者と距離を置き、自分の殻に閉じこもることでスマイルは自らを守っているのかもしれない。しかし、その見返りとして回復のチャンスを逃していると思われる。

4-1-2. 時間（未来短縮感）

人間関係のみならず、スマイルは、自分の生きる時間をも狭めている。心的外傷を負った者は、“未来が断ち切られた感じ”を抱く。たとえば、集団児童誘拐にあった子供は、将来の夢について聞かれ、「想像したこともない」「だって子供のうちに死ぬはずだから」と答えた〔ハーマン：68-69〕。

スマイルに関しても、同様の症状がみられる。彼の時間感覚の中では、未来は確かな手ごたえを持つものとして存在しない。通常なら未来に向かってなだらかに延びてゆく時間軸がぶつりと途切れているのだ。

スマイルの才能を買った小泉は、スマイルひとりのために、朝練習を設けるが、スマイルは行こうとしない。小泉が理由を問いただすと、“卓球は死ぬまでの暇つぶしだから”と答える。ここでは、スマイルの無力感、虚無感が示唆されていると思われる。周囲の期待を集める若者でありながら、スマイルは将来に夢も希望も持っていない。

強豪海王学園の風間が顧問と共にスマイルのスカウトにやってきたときの対応も極めてそっけない。海王側は設備の充実等さまざまな好条件をスマイルに提示し、“将来のために”と転校を勧める。しかしスマイルは、「将来か…」とひとことつぶやき、誘いを断る。「将来か…」というつぶやきには、スマイルのかわいた心情が象徴されているといえよう。

4-2. 侵入

侵入とは、不愉快な体験などがよみがえり、それに日常世界を侵されること、であり、典型例としては、フラッシュバックが挙げられる。作中でスマイルはしばしば、いじめられた体験のフラッシュバックに襲われている。ロッカーに監禁（中から出られないよう箒でドアをロックしてある）されたシーンでは、

遠くで電車の音が聞こえる。

ここは静かで安全な所だ。

とても落ち着くんだ。

誰か来る！

大丈夫。

僕はここで平気なんだ。

外に出たらまた…

また…

という追い詰められた心が生々しく描かれている。

さらに小泉との試合中に攻め込まれ、フラッシュバックを起こすシーンでは、

どうしてみんな僕に構うの？

何もしてないのに。

怒ってもいないのに。

笑ってもいないのに。

息も殺してる。

といういじめられっ子としての悲痛な叫びが追体験されている。スマイルの場合、ふとしたきっかけでこの種の記憶がよみがえることにより、心的外傷から回復していないと推測される。

4-3. 恐怖（過覚醒）

スマイルの表情は凍りついたようであり、何かを警戒しているような硬さが感じられる。卓球部の先輩に、「なんで笑わねえの？」と聞かれても、「疲れるんですよ、なんか」と答え、ポーカーフェイスを崩さない。笑顔をスマイルがみせることはめったになく、常に鋭く目を光らせている。これは、心的外傷を負った者特有の凍りついた目ざとさと一致する。

4-4. 絶対孤立無援感（極端な対人関係）

上記のようにスマイルは、周囲とほとんど関わらず、無力感を抱いて生活している。ただし、スマイルの場合、唯一の例外としてペコとは親密なつながりがある。ペコと一緒にいるときの、スマイルは肯定的な気持ちを持つことができる。幼いスマイルは、「僕、ペコみたいになりたいんだ！」とペコにあこがれのまなざしを向け、ペコと一緒に出場して入賞を果たした卓球大会で満面の笑みをうかべた。少年になったスマイルは、あえてペコと同じ高校を進学先と

して選び、一緒に卓球部に入る。そして、海岸でペコの“世界一になる”という宣言を聞き、「格好いいね、ソレ」「応援するよペコ」と微笑する。スマイルの対人関係は、過度のしがみつきと拒絶とに極端に分かれており、これは心的外傷を持つ者の特徴と合致する。

上記より、スマイルは心的外傷を負っているのではないかと推測される。

5. 最終章の意味

いいじゃないですか、凡庸。

僕ワリと好きですよ、そういう選手。

—スマイルのことは。

伸び悩み、弱音を吐くドラゴンに対して〔松本1997d〕。

『ピンポン』の最終章は、高校時代は、卓球選手としての才能を認められ、期待を集めていたスマイルが平凡な進路を選ぶというものである。これは一見淡泊でインパクトに欠けており、読者から異論も提示されている。しかし、ハーマンの心的外傷論の見地からすると、この最終章は、下記の点で意味を持つと考えられる。

5-1. 周囲との再結合

何気ないシーンだが、最終章の冒頭で小泉が自宅で鍋を探す箇所がある。

「今日は誠が来る」「鍋、鍋、何処よ？」

ここでは、スマイルは小泉にファーストネームで呼ばれており、両者が良好な関係を構築していることがわかる。高校のとき、スマイルは夕飯に誘われても即座に断っていたが、最終章では小泉とスマイルは親密なつきあいをしているのだ。

さらに、高校のときは、打診されてもすげなく断っていたタムラでのカブのコーチを引き受け、笑顔で指導している。その指導法は、

「エブリバディ集合!!!」「今日は、君らにかっちょいい魔球を授けるぜっ」

というように、ペコと小泉のやり方を合わせたものである。

スマイルは、ペコが海外で活躍しているというニュースに際しても、雑誌で読んで感心するという程度の反応におさまっており、かつてのようなしがみつきはみられない。

以上から、青年スマイルは、人間関係における狭窄から脱し、ノーマルな人間関係を構築・維持することが可能になったと思われる。青年スマイルは、ペコ・小泉をロールモデルとして自己を確立し、他者と適切な距離をとってつきあっていると推測される。

5-2. 時間感覚の正常化

高校のころ、スマイルは未来が断ち切られた感じを抱いており、将来の希望を失っていた。しかし、高2時のインターハイ予選から5年後には大学に通い、小学校の教員になるという目

標を持っている。このことから、スマイルは生きる希望をとりもどしたと推測される。

さらに、小学校の教師という進路選択は大きな意味を持つと考えられる。心的外傷を負った者が回復した際、生存者使命に目覚め、次世代の育成に目を向け、社会に貢献するケースがみられる。スマイルの場合もいじめのサバイバーとしていじめられている子供をサポートしようとしている可能性が考えられる。スマイルはペコに卓球を教わり、ペコと打ち合うことで心的外傷を克服した。トラウマを乗り越え、ペコをロールモデルのひとりとして自己を確立したスマイルは、いじめられっ子に卓球を教え、球を打ち合うことでトラウマを癒すという案を持っているのかもしれない。この場合、かつては被害者だったスマイルがサバイバーとして、サポート役にまわり、社会に貢献するということになる。

5-3. 正常な感情のとりもどしおよび平凡な日常生活の享受

高校時代のスマイルは生硬な表情をして、目を油断なく光らせていた。恐怖にさいなまれ、過覚醒状態だったと思われる。卓球部の先輩に、“なぜ笑わないのか？”と問われても、“疲れるから”と返答するなど、感情が凍りついている印象があった。しかし、高2時のインターハイでは、ペコと打ち合いながら涙を流すなど、感情をとりもどしたようにみえる。そしてそのインターハイから5年、青年スマイルは笑みを浮かべるなど豊かな表情をみせ、大学に通いつつタムラでコーチをするという穏やかな日々を送っている。青年になったスマイルは正常な感情をとりもどし、当たり前前の生活を享受しているように思われる。

最終章において、かつてのライバル、ドラゴンとのやりとりで、次のようなシーンがある。

「私はね、月本。世界選手権の代表からはずれてしまったよ」

「知ってます」

「最近時々考える。自分は凡庸な選手のまま終わってしまうのではないかと」

「いいじゃないですか、凡庸」「僕ワリと好きですよ。そういう選手」

何気ない会話だが、ここは重要である。このシーンでは、青年スマイルが平穏な日常の価値を認め、そこに安寧を見出していることが示唆されている。心的外傷を負った者は平穏な日常に満足し、そこに安住することができなくなっている。そこでスリルを求めて逸脱行為に走ったり、薬物中毒になったりするのだ。しかし、心的外傷から回復すると、被害者人生の退屈さに気づいてそれに別れを告げ、当たり前前の生活を享受するようになるのだ。たとえばあるサバイバーは、「私はスリル中毒であったが、裏表のないさりとした満足を味わえるようになった」と述べている〔ハーマン1992：321〕。

スマイルの場合も、心的外傷を克服し、被害者人生に別れを告げ、平凡な生活を享受できるようになったのではないかとと思われる。

ドラゴンと選考漏れの話をしたあとすぐにスマイルは、

「知ってます、風間さん」「結婚するってサクマ」

とアクマの近況に触れている。世界選手権の選考漏れの話と旧友の結婚話を同列に置くとこ

ろからも、スマイルが淡々とした日常の価値を認めていることがわかる。

『ピンポン』のラストシーンは、スマイルが「ふぁー」とあくびをし、「眠いや」とつぶやき、「はっ」とドラゴンが笑うというものである。そしてまさにそのとき、ペコのドイツでの試合が始まっていた。ここでは、トラウマを克服し、堅実な進路を選び、小市民的幸福を得るであろうスマイル、才能の限界を感じながら上を目指してもがき続けるドラゴン、世界一という夢に向かって突っ走るペコという三者の対比が鮮やかに描かれている。

5-4. 最終章の舞台が海だった理由

『ピンポン』においては、登場人物のターニングポイントでは、海が舞台に選ばれる。高1の初夏、海で、

「なんだか最近疲れるよ」「人間関係とか。卓球にしても…」「どんどん複雑になってくる感じで…」

と愚痴をこぼしたスマイルは、世界一になるというペコの夢を聞き、

「格好いいね、ソレ」「応援するよ、ペコ」と微笑した。その後、スマイルは顧問小泉と対戦して勝ち、急速に力をつけてゆく。

一方、ペコは、対アクマ戦での敗北などにより、自分の才能に限界を感じて卓球を捨てようとし、秋の海に入水するが、アクマに助けられ、再起を決意する（なお、アクマはこのとき、卓球に見切りをつけた）。

ふたりが高2のときのインターハイ予選では、スマイルに敗れた江上が引退を決意し、「海行こ、海」と初夏の海に向かう。最終章で、スマイルは堅実な自分の道を見出している。ここで提示されたスマイルの進路は一見地味に見えるが、オババが見抜いた通り、本人の資質からいって適切なものである。⁽¹²⁾

最終章のラストシーンのスマイルとドラゴンのやりとり（「ふぁー」「眠いや」「はっ」）はスマイルがその後、享受するであろう平穏かつ堅実な生活および小市民的幸福を示唆しているといえよう。このように考えれば、最終章の舞台として海が選ばれたのは妥当である。スマイルは、人生のターニングポイントを迎えており、確かな未来に向けて一步踏み出そうとしているのだ。⁽¹³⁾

上記より、『ピンポン』の最終章は、何気なく淡々と描かれているが、心的外傷論の観点からみると、深い意味を持つ妥当なものである、と結論づけられる。

かつて将来を期待されたスマイルが平凡な生活を送っていることは、物足りない印象を与えるかもしれない。しかし、逆説的ではあるが、ごくふつうの生活を送っていることにこそ、大きな意味があろう。なぜなら、心的外傷克服の基準は、被害者がノーマルな感覚をとりもどし、社会の中で平穏な生活を送ることができるかどうか、であるからだ。

6. 結論および今後の課題

僕の血は鉄の味がする

ーピンポンにおけるキーセンテンス。

上記より、①スマイルは心的外傷を負っていると推測されること、②『ピンポン』のラストは一見肩すかしにみえるが、①を踏まえると、平凡な人生にこそ大きな意味があると判断されることがわかった。自分の殻にこもり、恐怖におびえ、感情を凍りつかせ、無力感に圧倒されていた少年、スマイルは、ペコ、小泉、オババなどとの交流を通し、癒され、エンパワー（有力化）された。そして、青年スマイルは、周囲との再結合、ノーマルな感情の再獲得、アイデンティティー確立、エンパワメントを成し遂げ、小学校の教師になり社会に貢献するという目標に向かい、力強く歩き出している。「ピンポン」をスマイルが心的外傷から回復し、生きる道を見出す物語とみなすと、このラストは非常に妥当なものであるといえよう。

今後の課題について述べると、本稿は最終章の意味という「ピンポン」の一部を取り扱ったに過ぎない。今後は、スマイルが心的外傷から回復する過程において、より深く考察する。たとえば、ペコ、アクマ、小泉、オババが果たした役割を明らかにする所存である。さらに、『ピンポン』をペコが真のヒーローへと進化する物語とみて、エリクソンの理論を用いて分析すること、ペコとスマイルの相互作用に注目して『ピンポン』の構造を明らかにすることなども重要な課題といえよう。紙幅の都合上、本稿では割愛したが、「僕の血は鉄の味がする」という『ピンポン』のキーセンテンスの意味の解明というテーマも興味深い。

さらに、松本大洋の他の作品、たとえば『花男』⁽¹⁴⁾についても、ハーマンの心的外傷論を用いて、キャラクターが心的外傷から回復する過程とラストの意味を明確にすることができよう。心的外傷からの回復には、生きる意味を見出し、アイデンティティーを確立することが必要だが、その点では、『Comic cue』に掲載されたドラえもんのパロディー作品⁽¹⁵⁾も興味深い。この作品に関しては、青年になったのび太が生きる道を見出し、自己を確立する過程とそこで普通の猫となったドラえもんが果たす役割に注目して、分析を行う予定である。その他、松本大洋論に関しては、『ピンポン』と他の作品との構造上の相違点を明らかにし、その上で松本作品の底を流れるメッセージを導出するというテーマが課題として挙げられる。

(注)

- (1) スマイルのあだ名の由来は、“笑わないから”。事実、『ピンポン』において、幼少時のスマイルの笑顔はほとんど出てこない。
- (2) 高1でインターハイを制した実績を有する。名門海王学園卓球部に属するが、その先行きに危機感を持っている。スマイルの実力をいち早く見抜き、スカウトするが拒否される。試合前には、不安とプレッシャーのあまり、会場のトイレに閉じこもる。
- (3) 文中のかぎっこ内のうち、『心的外傷と回復』の典拠が挙げられていないものは、『ピンポン』〔松本1996a〕〔松本1997a〕〔松本1997b〕〔松本1997c〕〔松本1997d〕から引用した。なお、本稿執筆

- にあたり、『ピンポン』全5巻を随時参照，引用した。
- (4) たとえば，“日々是眼鏡”
<http://www.enpitu.ne.jp/usr3/bin/month?id=39439&pg=200204> 2006年10月9日アクセス)では，肯定的に捉えられているが，このラストでよかったのかという否定的な見解もある。かつて“ソコカラナニガミエル?”という松本大洋の有名なファンサイトがあったが，その管理人は，ラスト否定派であった。“黒猫の三角”
<http://www3.famille.ne.jp/~sow/imp/imp2002/pingpong.htm> 2006年10月9日アクセス)の管理人もラスト否定派である
- (5) 書誌情報は，Judith Lewis Herman, *Trauma and Recovery*, Basic Books, A Division of Harper-Collins Publishers, Inc., New York, 1992
- (6) 駅前で卓球場タムラを運営。ペコ，スマイル，アクマをジュニア時代から指導。かつては卓球の名選手として，国際的に活躍した。
- (7) この進路選択に関し，オババはスマイルに，「お前にはあの程度の学校に入ってほしくなかったね」「いつまでもペコの背中に隠れてないで…いい加減前に出て勝負したらどうだい!？」と苦言を呈した。
- (8) 中国から留学してきた卓球エリート。本国で挫折し，日本での活躍に再起を懸けている。
- (9) ペコとスマイルの幼なじみ。不器用だが，努力を重ねて這いあがる。ペコとは仲が悪く，会えば言い争いをするが，その才能を認めている。
- (10) 片瀬高校の英語教諭兼卓球部顧問。かつては，次代の日本卓球界を担う逸材と期待されたが，精神面の弱さが災いして挫折，失意のうちに引退した。スマイルに夢を託すが，反抗にあうなど指導に苦勞する。
- (11) これに対するスマイルの返答は，「僕の生き方です」「先生には関係ない」。
- (12) スマイルの高校時代，オババはスマイルにカブのコーチを依頼した。
- (13) 高1時の海のシーンと最終章で，“夏が来る”というスマイルのセリフを重複させているのは粹な演出といえよう。
- (14) 松本大洋の代表作のひとつ。30過ぎの大人だが夢見がちなフリーター，花男のもとに，別居していた長男茂男があずけられる。親子間の葛藤を通じ，それぞれが生きる道を見出してゆくという成長物語。
- (15) 松本大洋作品においては，異色の短編。『Comic cue』の第2号(江口寿史編，イーストプレス，1996)に掲載された。青年になったのび太は，ひとはなぜ生きるのかという実存的な問いに直面し，苦悩する。もはや道具により彼を助けることができないうドラえもんは，ふつうの猫の姿(ただし耳はない)でかたわらにたたずむ。閉塞感の中，もがくのび太のもとに，過去ののび太，未来ののび太があらわれる。彼らとの会話を通し，青年ののび太は生きづらさを抱えつつ生きる意味を見出す(松本1996b)。

〔引用文献〕

- ジュディス・ハーマン 『心的外傷と回復』，みすず書房，1992。
 松本大洋 『ピンポン (1)』，小学館，1996a。
 松本大洋 「ドラえもん」(パロ)，『Comic cue』，Vol.2，イースト・プレス，1996b。
 松本大洋 『ピンポン (2)』，小学館，1997a。
 松本大洋 『ピンポン (3)』，小学館，1997b。
 松本大洋 『ピンポン (4)』，小学館，1997c。
 松本大洋 『ピンポン (5)』，小学館，1997d。